

8-9					
主題	高齢者が他者のために動くことを職員がサポートする個別支援				
副題	誰かのために動くことは社会参加の第一歩				
キーワード 1	個別支援	キーワード 2	社会参加	研究(実践)期間	18ヶ月

法人名・事業所名	社福) 北野会 グループホームマイライフ徳丸
発表者(職種)	今井直美(介護職員)、高木理望(介護職員)
共同研究(実践)者	下別府知広(管理者)、他

電 話	03-3933-0131	FAX	03-5921-1003
-----	--------------	-----	--------------

事業所紹介	平成15年に開設された東京都板橋区徳丸にある9人1ユニットのグループホーム。敷地内には特別養護老人ホーム、ショートステイ、デイサービス、居宅介護支援事業所、訪問介護、地域包括支援センターを併設。板橋区徳丸地域の高齢者が安心して生活できることを理念に事業を行っている。
-------	---

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

当施設は平成26年度まで毎月行事を実施していたが、入所ご利用者のADLの差が開き、全員が同じ行事内容では楽しむことができなくなっていた。そこで、27年度から行事数を半減し、その分の予算と職員配置を個別支援に充ててきた。開始当初の個別支援は入所者に対し「行きたい所はないか」「外食して食べたい物はないか」など、入所者自身に「やってほしいことはないか」を聞く個別支援が中心であった。しかし、入所者自身もいくつか要望はあるものの、次第に「もうないよ」「もう十分だよ」と返答されることも多くなっていた。また、言語コミュニケーションが取れない方の個別支援の継続に関しても、課題を抱えるようになっていた。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

本研究は高齢者の自発的となる個別支援を継続すること、ニーズ把握の難しい高齢者の個別支援を継続して実施していくことを研究の目的とした。

その上で個別支援は「高齢者自身が楽しむもの」と「高齢者が他者を喜ばせ自身が満足するもの」の2種類あると仮定。前述の個別支援は具体的な意思表示のできるご利用者に有効だが、コミュニケーションが難しい方や現在の生活にあまり変化を求めないご利用者にとっては、継続的にニーズを引き出すことが難しいこともある。対して後述の個別支援は高齢者が主体となり、周囲に働きかけることで新たな支援を生み出していく可能性がある。高齢者もやってもらう立場を望むのではなく、やる立場に立ちたいのではないかと。そして、そこから得られる「他者と喜びを共有すること」で、違った満足感を得ることができるのではないかと仮定した。

《3. 具体的な取り組みの内容》

まず職員はアプローチ方法を改めた。高齢者自身がやってほしい事だけではなく、高齢者を取り巻く周囲の環境や人間関係にも目を向け、誰かのためにやりたい事・やれる事がないかを探し

た。「〇〇を喜ばせるために～をしないか」「こんなことをすれば〇〇が喜ばないか」といった提案や声掛けも取り入れた。

すると「ひ孫が産まれるから、お祝いを渡したい」「私の故郷の秘伝の梅干しを作って皆に食べさせたい」「海外の友人に手紙を書きたい」「私は農家出身、美味しい野菜を作って、ここの人たちに食べて喜んでもらいたい」といった今までとは違った「誰かを喜ばせたい」というニーズが出てきた。これらのニーズを新たな個別支援と位置づけて時間と予算をかけて実施。ひ孫のための買い物に同行し、梅干し作りの助手を引き受け、手紙を書くサポートを行い、畑も一緒に耕した。すると、「野菜づくり」に取り組んでいた高齢者から新たなニーズが提案された。「もっと多くの人に食べてもらいたい」と。そこで、収穫された野菜を法人内の職員に限って販売することに。この話を伝えると、高齢者が自ら動き出した。毎日畑に出向き野菜を収穫してパック詰め、手作りのお礼状も添えることに。誰かを喜ばせたいというニーズは欲が出る。もっと喜んでもらいたいと高齢者が自発的に動き出す個別支援にかわっていた。

また、言語コミュニケーションが取れない方の個別支援では、ご家族の情報提供から、お孫さんが部活で全国大会に出場する情報をキャッチ。お孫さんのために神社へ必勝祈願に行くという個別支援が職員から提案された。この個別支援を実施して数週間後、事実を知ったお孫さんは大変感激し、「祖母が私のためにこんなことをしてくれていたことに驚いた、とてもうれしい」とご利用者に向けて直接感謝の意を述べられていた。

《4. 取り組みの結果》

アプローチの方法を変え、個別支援の目的を「誰かのため」と定めたことにより、入所者のニーズが変化した。高齢者が「やってもらう立場」から「やる立場」にかわり、他者と喜びを共有することで自主的・自発的な個別支援が継続できるようになった。

《5. 考察、まとめ》

受け身の立場だと意欲は低下する。「誰かのため」という個別支援を職員がサポートすることで、高齢者の自主性を引き出し、より展開した個別支援が期待できる。また、他者を巻き込んだ個別支援をサポートすることは、高齢者と社会の関係を構築し、高齢者自身の存在価値を高めることにもつながる。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

アクティブ福祉in東京 抄録集 第1回～11回(平成29年5月17日閲覧)
<https://www.tosw.tvac.or.jp/bukai/kourei/taikai/2015-0812activekakosyourouku.html>

《8. 提案と発信》

誰かのために動くことは「社会参加」への第一歩と言える。他者と関わろうと自発的に動き出した時、高齢者も自らが社会の一員であることを自覚する。私たちが目指す個別支援は、社会参加を促すための手段として、個別支援の内容を高齢者と共に考えて実施すること。そして私たちは、高齢者が社会のために活動しやすいような環境を整え、サポートしていくことが介護者としての一番の役割と考える。